

白山ふるさと文学賞

第三十八回暁烏敏賞選考結果並びに選評

(梶田 叡一 委員長)

本年(第三十八回)の応募作品数は、第一部門〈哲学・思想に関する論文〉が三十九点、第二部門〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉が十点、合わせて四十九点であった。

本年度で三十八回目を迎えた本賞は、例年、多彩な職種や年齢層からの応募をいただき、本賞に多くの関心が寄せられてきたことは大きな喜びであり、本賞が重ねてきた歴史と重要性を再認識するとともに、今後ますます継続・発展させていく大きな使命を感じているところである。

去る九月二十八日、暁烏敏賞選考委員会(委員長・梶田叡一、選考委員・川村覚昭・山本哲也・氣多雅子・上原麻有子)が、京都市内において開催された。

選考に当たっては、「伝統文化の継承発展と次代を担う子どもの育成を図る」という本賞の趣旨に則り、論旨が明確かつ独創的であること、全体の構成が整っていること、および広く市民の啓発に資するものであることなどに留意しつつ行った。

本年は例年にもまして、第一部門・第二部門共に甲乙つけ難い優れた論文が多かった。

選考委員会は長時間にわたる活発かつ慎重な審議を行った結果、第三十八回暁烏敏賞受賞者を次のように決定した。

第一部門〈哲学・思想に関する論文〉

入選論文名

不信心の近代知識人たちへ

—富士川游による真宗教学の新しい解釈—

吉田 智子

【選評】(川村 覚昭 委員)

本論文は、医学者であり自然科学者である富士川游の宗教思想、特に親鸞の信仰を背景にした宗教観と信仰観を明らかにしようとするものである。

そのため、研究の手續きとして、富士川が生きた同時代の自然科学の発達とその宗教への影響を丹念に論じ、そのうえで富士川が自然科学者として到達した宗教観と信仰観を抉出している。

その展開は論理的であり哲学思想の論文に相応しいものである。ただ筆者が意図する「真宗教学の新しい解釈」という点では問題が若干残る。

真宗教学に関してには伝統的な研究が蓄積されているが、それについての論究が希薄であり、解釈の新規性が十分に出ていないことである。

本論稿が哲学思想論文として優れたものであるだけに筆者の今後の研究に期待したいと思う。

第一部門〈哲学・思想に関する論文〉

佳作論文名

中川一政の画業にみる武道精神

―宮本武蔵「独行道」を受け継ぐ

大嶋 利佳(大学院生)

【選 評】(上原 麻有子 委員)

本論文は、中川一政の独自の画風には、宮本武蔵の武道精神を認めることができるという点に注目し、極めて斬新な主張を展開している。

近現代の画家と、近世一流の剣客でありかつ画家。一見まるで異なる表現法をもつ二つの個性を重ねつつ論じる手法は見事である。

なぜ中川は他の模倣を一切拒んだのか。

本稿は、その理由を探ることを目的とし、『中川一政全文集』(全十巻)および武蔵の著作、水墨画を丁寧に読み解き、二人の精神の共通性を実証している。

その共通性が「独行道」であるのだ。大嶋氏の研究は、言わば孤高の画家、中川の思想を解き明かしてくれた。

彼は、芸術の創作には、禅の公案で一人格闘するのにも似た生き方が要されると考えていたようだ。

第二部門〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉

入選論文名

学校教育、家庭教育の両方において大切にすべきこと

梶井 大輔(大学准教授)

【選 評】(山本 哲也 委員)

「我が子の指導がいちばん難しい」

多くのスポーツ指導者が語る言葉です。

梶井大輔さんの論文はこうした懸念を打ち破るヒントを含んでいるように思います。

野球に打ち込む次男に具体的な年間目標と到達目標を示し、更に努力の経緯や結果を数値化・可視化し成長を確認します。

その一方で野球をする目的を、じいちゃん、ばあちゃんを元気づけることとし、お母さんやお兄ちゃんも含めて一家一族の絆の強さをも感じさせます。

著者は一年間にわたる実践を、現行の学習指導要領で強調される「多面的な評価」・「人間性の涵養」とも関連付けて考察し、野球の技術だけでなく、「人を育てる」重要性を訴えます。

この親子の記録を是非多くの方々に読んで欲しいと願っています。

第二部門へ子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ

佳作論文名

「愛着を育てるということ」

児童精神科医からの提言

秋谷 進(精神科医)

【選評】(氣多 雅子 委員)

本エッセイは、児童精神科医としてこれまでさまざま子どもたちと接してきた著者が、不安定な現代で特に重要な障害として「愛着障害」に注目し、どのようにそれを乗り越えていったらよいかを提言するものである。

「私は愛されているから大丈夫なんだ」と思えない子どもは自己評価が極端に低く、他人や社会との繋がりに不信をもってしまう。

子どもの愛着障害に気づいた時点で、子どもにとつての「安全基地」を作ることが必要であることを、著者は詳細に論じている。

幼児期の愛着形成が非常に重要なことは確かであるが、子どもが年長になっても親以外の人によっても愛着の形成は可能であるという提言は注目すべきであろう。

本エッセイは現代社会での子どもの育成について非常に重要な問題を扱ったものとして高く評価できる。

ただ、愛着を育てることに關して父親についての言及がないことが惜しまれる。

愛着形成における父親の役割の探究は現代社会の課題であろう。